

## 「五感」と「語感」

「われは海の子」と「琵琶湖就航の歌」は、お互いに歌詞を入れ替えて歌っても、ぴったりはまる。と女房に言ったら、「1へえ」くれた。

弊社のある子飼レトロ通り商店街では、一日中有線放送がかかっている、この夏から秋にかけて「琵琶湖就航の歌」を一日に何回も聞かされた。女性の歌手が歌っていた。この歌は6番まであり、通して歌詞を読むと、なんだか、ヨットマンか何かのプレイボーイの、港々に女ありというような話にもとれるが、とにかく、3番までは結構いい歌詞だ。

2番は、「松は緑に 浜白く 雄松が里の処女子（おとめご）は 赤い椿の森陰に 幼い恋に泣くとかや」である。赤い椿の森陰という表現は、簡潔で美しい。照葉樹の林や竹林には、ヤブ椿やモミジの赤がよく映える。今年は、記録的な猛暑と相次いだ台風のダメージか、紅葉がさえない。産業道路の警察学校あたりのナンキンハゼ並木の紅葉もいまひとつである。

「われは海の子」の2番もよい。後半の「千里寄せ来る海の気を 吸いて童（わらべ）となりけり」というところが特によい。自然の気を胸いっぱい、思う存分吸い込んだ経験のない人はダメだ。その経験を思い出すような活動をせず日々過ごしている人も、やはりダメだ。

沖縄では、「かりゆしウェア」というものがある。こちらで言う「アロハシャツ」のようなもので、「ゆしてくる」とは、「満ちてくる」「湧いてくる」というような意味合いの言葉だと説明してもらったことがある。大海原を寄せてくる海の気は、波や風やそのリズムの中にあり、小さな島を満して通りぬけていく。だから、多くの人が沖縄に惹かれ、行けば元気が湧いてくるのだと思う。同じように、阿蘇の草モミジの原野を歩けば、大地の気が沁み出してくるのを感じ、それが体を通り抜け清浄になっていくような感じがする。

「ローレライ」の歌詞も、美しい。誰の訳かと調べてみたら、近藤朔風という人らしい。きつと、偉い人に違いない。もともとの詩は、ハイネの作である。訳詞は、次のとおり。

- (1) なじかは知らねど 心わびて 昔の伝説(ツエ)は そぞろ身に染む  
わびしく暮れ行く ラインの流れ 入り日に 山々赤く映ゆる
- (2) 美(ウ)わし 乙女(ホメ)の巖(イオ)に立ちて 黄金(コガネ)の櫛(クシ)とり 髪(カミ)の乱れを  
ときつつ口ずさむ 歌の声の くすしき魔力(マジカ)に 魂(タマ)も迷う
- (3) 漕ぎ行く舟人(フナト) 歌にあこがれ 岩根も見やらず 仰げばやがて  
波間に沈むる 人も舟も くすしき魔歌(マジカ) 歌うローレライ

この歌の冒頭の「なんだか知らないけれど心がわびて」という部分は、その後「誰かに電話した」とか「コンピュータのスクリーンの中でチカチカしている文字に手を当ててみると、温もりを感じた」というようなことにつながるものではない。海の気や大地の気を吸い込む、その皮膚感覚を伴ってライン河の「気」を想起させるものである。秋は秋、冬は冬の、ライン河畔の湿度や温度を喚起するものである。3番の冒頭もよい。ローレライの歌には、惑わされるのではなく、あこがれるようではなければならないと反省した。

アニメ映画「平成狸合戦ポンポコ」の中で、狸たちが、一大決心し大勢で「化け物」に化けて夜の住宅地を練り歩く場面がある。住宅開発で棲みかを奪う人間に対し、狸たちが反旗を翻し総力戦をしかける、映画のクライマックスである。

一つ目小僧や大入道、唐傘、口クロ首などが、文字通り鳴り物入りで街中を練り歩く。その場面をみながら、子どもの頃感じた「お盆過ぎ頃の夜風の湿度や温度」が肌に呼び起こされていた。しかし、映画の中の人間たちは、化け物を怖がることはなく、まるでテーマパークのアトラクションを楽しむように振舞う。その展開に違和感を覚えた途端、映画の中でも場面が急転し、化け物たちは力を失い、次々にしぼんで消えていった。宮崎駿監督は凄い人に違いない。映画の最後のシーンに狸が出てきて「生き物たちが姿を消したって言い方、あれ、やめてくれませんか!？」と言うところが、またよかった。志ん朝師匠の語りもよかった。

「へえ」の最高得点は、「18782 + 18782 = 37564」で、「イヤナヤツ、イヤナヤツ ハ ミナゴロシ」らしい。へえ、だけれども、あまりよい話ではない。

『エンタの神様』や『笑いの金メダル』などに出てくるピン芸人を見ていると、「残念」とか「間違いない」とか「わたしだけえ〜」とか「ひろしです」とか、演出は違うが、他人のことを（自分のことも）を揶揄しているだけで、芸の力はいまひとつ。漫才コンビはコントに走っている。コントの方が分かりやすいし、テレビ的に細工も入れやすい。演芸は進化しているけれど、聴衆は退化しているようだ。でも、面白いので毎週見てしまうし、真似してしまう。

手拍子を続けていると、自分だけ皆からズレていくとです。・・・ひろしです。

ブタゴリラとジャイアンとの区別がつきません。・・・ひろしです。

わたしだけえ？5千円札の樋口一葉は男だと長いこと思っていたのは。（昔、マギー審司の師匠のマギー司郎と人気を分けた伊藤一葉というチョビヒゲの手品師がいて、同じ一葉だから男と思っていた。樋口一葉と言えば「にぎりえ」「たけくらべ」だって言うじゃな〜い。でもアンタ、それは受験用に覚えた知識で、実際に読んだことないですからあー。残念!!）

NHKのテレビの影響か、子どもが、昔の名著の一節を丸暗記するようなことが流行っている。落語の「寿限無」を全部言える子も多い。私は、25年前から「寿限無」を言うことができる。全国のコンサルの中で、寿限無を言わせたら私がナンバーワンだ。

先日、合志町でまちづくりワークショップがあった。50戸ほどの集落を単位に、地区魅力化計画の策定を行っている。町の企画課は「まちを歌に詠ませる」ワークショップをよくする。俳句や短歌、キャッチフレーズを作って、短い言葉に思いを凝縮させる。まちのことを深く考えることにつながるよい手法である。

「観音と 共に流れる横町の 時の流れは 時代の一步」が最優秀作に選ばれた。言葉の重複はあるが、佳い。横町地区には800年続く「観音祭り」があり、大人から子どもへと笛太鼓の技が伝承されている。アンケートの結果、子どもたちが一番誇りに思っていることが、観音祭りだった。横町も少子・少親・超高齢化している。その中で、歴史と伝統、それを守ってきた先人を思いつつ、新たなまちづくりに取り組もうということだ。この歌は、そうした地区魅力化事業の主旨をよく理解し見事に表現している。作者は小学生の男の子である。